

## 論文の内容の要旨

論文題目 ネルヴァルの詩学

氏名 田村 毅

「ネルヴァルの詩学」La poétique nervalienne と題する本論文は、詩人ジェラルド・ド・ネルヴァルの詩を中心に、その作品創造過程をたどるものである。「詩学」la poétique とは、本論では、韻律などの詩的技法すなわち狭義での「詩法」を意味するのではなく、ポエジーの語源 poiêsis (=création) である「創造」の語義に依拠して、より広義に詩人の創作上の指針を示す語として用いている。本論は究極的には『幻想詩篇』の解明を目指す「詩論」ではあるが、詩句の一行一行に詩人の人生のある特権的な瞬間の記憶と想像力が凝縮されて表現されており、それを理解するためには必然的に他のすべての作品と伝記とを参照せざるをえない。したがって、本論文は詩論、作品論であると同時に評伝でもある。

遺された手紙、未刊の草稿類もまた、公刊された作品同様の魅力的な文体で書かれ、書簡と草稿と作品とが互いに共鳴し合い、「ネルヴァル」という人物＝作品空間へと読者を導いてきたのであり、死後、現在にいたるまで詩人の自伝的作品をもとに虚実混淆の多くの伝記が書かれてきた。伝記的空白を作品の一部で補いつつ数多の研究者たちが「ネルヴァル」像を追い求めてきたのである。

本論文は、日本の読者にとってよりわかりやすい方向、つまり詩句の解釈から出発するのではなく、伝記と作品の紹介から書き始め、『幻想詩篇』の詩句へとたどりつく方向を選んだ。巻末に『幻想詩篇』対訳を付録したのも、このような意図からであり、筆者の解釈を示す「対訳」部分がいわば本論の「結論」をなすのであり、その延長上に日本語版『ネルヴァル全集』（共編訳 全六巻）が位置する。

第 部「伝記と虚構」においては、ネルヴァルの人生と作品全体の輪郭を示した。第 部「風刺詩と叙事詩」では、詩作の出発点をなす初期作品を紹介し、詩創作の視点から後期作品との断絶と連続を論じた。第 部「幻想と神話」においては、詩句に暗示されている「特権的瞬間・空間（ナポリ・ウィーン）」、「女性（恋人・女優・女神）神話」等、詩人の想像力の中核をなす「幻想」と「神話」が主要作品中でいかに展開されているかを検討した。そして第 部「自己探求の道程」では、「ナポレオン神話」に自己の救済願望を託す詩人像、神話的詩作のモデルとしたデュバルタスの詩、そして無数に分裂増殖する自己を創作の指針とする詩人像を『火の娘たち』序文に読み取り、その究極的表現として詩「エル・デスディチャド」を提示した。補遺「エピローグ」では、伝記的なネルヴァル神話の出発点を示した。